

腹腔鏡下に切除した 副腎周囲発生型類表皮嚢胞の1例

小路 直¹, 内田 豊昭¹, 中野まゆら¹
長田 恵弘¹, 臼井 幸男², 寺地 敏郎²

¹東海大学医学部付属八王子病院泌尿器科, ²東海大学医学部外科学系泌尿器科学

LAPAROSCOPIC RESECTION OF RETROPERITONEAL EPIDERMOID CYST ON THE RIGHT ADRENAL GLAND: A CASE REPORT

Sunao SHOJI¹, Toyoaki UCHIDA¹, Mayura NAKANO¹,
Yoshihiro NAGATA¹, Yukio USUI² and Toshiro TERACHI²

¹The Department of Urology, Tokai University Hachioji Hospital

²The Department of Urology, Tokai University School of Medicine

A woman in her sixties was found to have pain in her upper back. An adrenal tumor was found by abdominal sonography and she was referred to our hospital. Computed tomography (CT) and magnetic resonance imaging (MRI) showed right adrenal cystic tumor. We diagnosed the tumor as right adrenal cystic tumor, and performed surgical excision by laparoscopic surgery. The resected tissue was a gray surface cystic mass, weighing 20 g. Histopathological examination of excised tumors revealed an epidermoid cyst.

(Hinyokika Kiyō 56 : 315-317, 2010)

Key words : Epidermoid cyst, Laparoscopic resection

緒 言

類表皮嚢胞(嚢腫)は、嚢胞性奇形腫(成熟奇形腫)の中で、外胚葉成分が優勢に発達したものとされ、後腹膜腫瘍として発生する頻度は低いことが報告されている。症状は、その発生部位から特異なものではなく、腫瘍の増大につれて膨満感、疼痛などの多彩な症状を来す。今回、われわれは、右背部違和感を主訴に発見された右副腎周囲に発生した後腹膜類表皮嚢胞に対し、腹腔鏡下腫瘍切除術を施行した1例を経験したので報告する。

症 例

患者：60歳代、女性

主訴：右上背部痛

家族歴・既往歴：特記すべきことなし

現病歴：2009年8月に、右上背部痛を主訴に他院受診。腹部超音波検査にて、径40mm大の右副腎腫瘍を指摘され、精査加療目的で当科紹介受診した。

初診時現症：身長157cm、体重46kg、体温36.2°C。右上背部痛を自覚。

初診時検査所見：血液生化学的、副腎関連内分泌学的検査および尿検査では、明らかな異常所見は認められなかった。

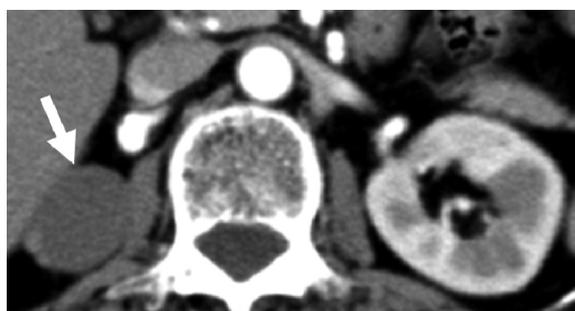


Fig. 1. Abdominal CT scan showed a cystic mass located in the right retroperitoneal space.

画像所見：腹部造影CTでは、右副腎外側下縁と連続した、径23×30mm大の造影効果の乏しく、内部がlow densityで均一な腫瘍が認められた(Fig. 1)。腫瘍内部は、T1強調MRI画像で、低信号、T2強調画像で高信号として認められ、嚢胞性腫瘍と考えられた。また、腫瘍内部の成分は、T1強調画像において、脳脊髄液よりも軽度高信号であったため、漿液性成分ではなく、粘稠度の高い液体成分であることが示唆された(Fig. 2)。以上の所見から、副腎嚢胞性腫瘍と診断し、腹腔鏡下に腫瘍切除術を施行した。

手術所見：腫瘍と腎臓との間を剥離した際、剥離面から灰白色調で弾性硬の線維性被膜を有する表面平滑な腫瘍表面が認められた。画像所見上、腫瘍は副腎外

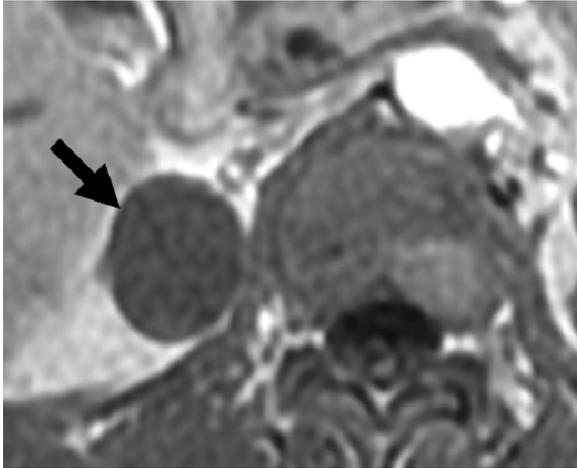


Fig. 2. T1-weighted MRI scan showed a retroperitoneal mass with a low-intensity area.



Fig. 3. Resected tissue was a pale yellow solid and white mucous mass, which was 32×42×30 mm in size and 20 g in weight.

側下縁と連続して認められたが、副腎外腫瘍の可能性もあるため、腫瘍周囲脂肪組織を慎重に吸引、剥離したところ、腫瘍と右副腎との間に癒着や連続性は認められず、副腎外腫瘍と診断された。腫瘍は、表面平滑で、悪性所見を疑わせる所見は認められなかったため、副腎は温存し、腫瘍のみを切除した。手術時間は84分、術中出血量は15 mlであった。

病理組織学的所見：摘出腫瘍は、大きさ32×42×30 mmで、重量20 gであった (Fig. 3)。腫瘍は、黄白色の混濁した粘稠度の高い液体に満たされた嚢胞として認められ、病理組織学的に、内面は数層の線毛円柱上皮や扁平上皮で被われており、嚢胞周囲には、平滑筋組織も認められ (Fig. 4)、悪性所見は認められなかった。以上から、後腹膜類表皮嚢胞と診断した。術後経過は良好で、手術5日後に退院し、右上背部痛は消失した。

考 察

類表皮嚢胞は、嚢胞性奇形腫の中で、外胚葉成分が

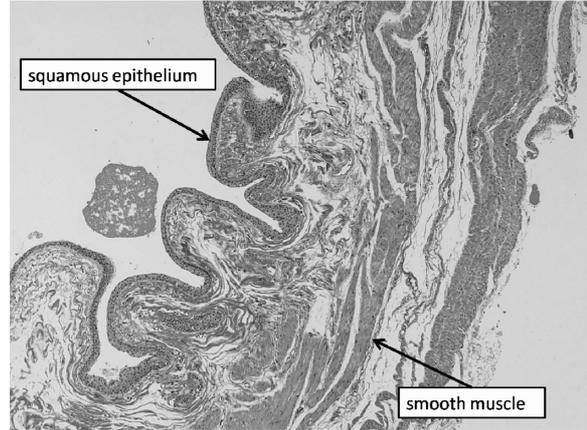


Fig. 4. Histopathological examination of excised tumors revealed epidermoid cyst (HE stain, ×4).

優勢に発達したもので、外胚葉の迷入によって生じる皮膚様組織からなり、皮膚付属器を有さないことにより、類皮嚢腫と鑑別される¹⁾。類表皮嚢胞は、全身に発生することが知られており、頻度の高い腹腔内臓器として脾臓が挙げられる²⁾が、後腹膜での発生は比較的稀である。

超音波検査所見として、腫瘍内部が低エコーなパターンや内部に高エコーな spot が点在して認められるパターンが報告されている^{3,4)}が、これは本症例でも認められたように、腫瘍内容物として、ケラチンや変性した剥離細胞を含む泥状物質が認められたことを反映したと考えられる。また、CT所見では、薄い壁の内部に均一な液体吸収像が認められることが報告されている⁵⁾。

大井らは、本邦における後腹膜嚢腫性病変を集計し、1) 嚢腫 (単に嚢腫とのみ記載され、詳細不明なもの)、2) 皮様嚢腫 (類表皮嚢胞を含む)、3) リンパ嚢腫、4) 漿液性嚢腫、5) 血液嚢腫、6) 類皮嚢腫、7) 結核性嚢腫、8) 軟化嚢腫、9) 仮性嚢腫、10) 包虫嚢腫に分類し、類表皮嚢胞は、147例中4例 (2.7%) と報告している⁶⁾。また、1983年以降に本邦において報告された後腹膜類表皮嚢胞14例^{3,4,7-16)}の発生部位は、仙骨前面が8例⁷⁻¹³⁾ (57%)、副腎周囲が自験例を含めて3例^{3,4)} (21%)、左腎下極¹⁴⁾、盲腸～上行結腸背側¹⁵⁾および腎内¹⁶⁾がおのおの1例 (7%) と、本症例のように副腎周囲発生型類表皮嚢胞は比較的稀である。

類表皮嚢胞の病因として、組織発生の途上で後腹膜腔に母組織が遺残あるいは迷入した発生異常の場合と、外傷により表皮下に迷入した表皮組織が嚢胞を形成する場合が考えられている¹⁷⁾。本症例の病因は、外傷や手術の既往歴がないことから、前者と考えられた。

今回、われわれは、画像診断上、副腎嚢胞性腫瘍と

診断したが, 術中の判断で, 腫瘍のみを切除した副腎周囲発生型類表皮嚢腫の1例を経験した. 副腎周囲発生型類表皮嚢腫は, 術中所見から副腎外腫瘍と診断でき, 慎重な剥離を行うことにより, 副腎を温存し, 腫瘍のみを切除することができると考えられた.

また, 後腹膜奇形腫の25.8%が悪性であることが報告されている¹⁸⁾が, 本症例では, 病理組織学的に悪性所見は認められず, 再発や転移に関する経過観察の必要はないと思われる.

結 語

右上背部痛を主訴に発見された右副腎周囲発生型類表皮嚢胞を, 腹腔鏡下に切除した1例を報告した.

文 献

- 1) 向井 清, 真鍋俊明, 深山正久: 外科病理学 3 口腔・顎, 第4版, 分光堂, 東京, 115-148, 2006
- 2) 三浦敏夫, 石井俊世, 下山孝俊: 脾の Epidermoid cyst の1手術例と本邦29例の検討. 外科診療 **28**: 1214-1218, 1986
- 3) 大沼俊和, 沼田正樹, 加藤禎彦, ほか: Retroperitoneal epidermoid cyst の1例. 岐阜医師会医誌 **3**: 205-210, 1990
- 4) 平井正孝, 増田宏昭, 大田原佳久, ほか: 後腹膜類表皮嚢胞の1例. 臨泌 **47**: 147-149, 1993
- 5) Yang DM, Fung DH, Kim H, et al.: Retroperitoneal cystic masses: CT, clinical, and pathologic findings and literature review. Radiographics **24**: 1353-1365, 2004
- 6) 大井鉄太郎, 松岡敏彦, 鈴木三郎: 後腹膜嚢腫の1例および本邦後腹膜嚢腫の統計的観察. 臨泌 **28**: 521-528, 1974
- 7) 中川龍男, 会田靖夫, 藤原正之: 尿閉を呈した類表皮嚢胞. 臨泌 **50**: 879-881, 1996
- 8) 江畑智希, 服部龍夫, 小林陽一郎, ほか: 前仙骨部 epidermoid cyst の1例. 日臨外医学会誌 **58**: 2454-2457, 1997
- 9) 池田直也, 渡部高昌, 仲川昌之, ほか: Presacral epidermoid cyst の1例. 日臨外医学会誌 **58**: 2709-2715, 1997
- 10) 永野靖彦, 吉本 昇, 中島 進, ほか: 成人仙骨前類表皮嚢胞に発生した扁平上皮癌の1例. 日臨外医学会誌 **59**: 2695-2699, 1998
- 11) 木村章彦, 竹本大樹, 川原洋一郎, ほか: 成人男性に発見された仙骨前部類表皮嚢胞の1例. 鳥取医誌 **28**: 15-19, 2000
- 12) 柴田佳久: 前仙骨部 epidermoid cyst の3手術例. 日本大腸肛門病学会誌 **60**: 178-185, 2007
- 13) 北村 慶, 西田暁史, 末吉 真, ほか: 成人の仙骨前面後腹膜腔に発生した類表皮嚢胞の1例 CT・MRI 画像を中心に. 武雄杵島臨医誌 **18**: 43-48, 2008
- 14) 伊藤周二, 伊藤哲也, 森川洋二, ほか: 後腹膜類表皮嚢胞の1例. 泌尿器外科 **13**: 205-208, 2000
- 15) 山下孝二, 宮嶋公貴, 安森弘太郎, ほか: 後腹膜に発生した類表皮嚢胞の1例. 臨放 **48**: 1581-1584, 2003
- 16) LimSung C and KimChul S: Intrarenal epidermal cyst. Pathol Int **53**: 574-578, 2003
- 17) 高橋 広, 木村 茂: 腫瘍性疾患 後腹膜類皮嚢胞. 別冊 日本臨床 領域別症候群 **11**: 127-128, 1996
- 18) Bruneton JN, Diarid F, Drouillard JP, et al.: Primary retroperitoneal teratoma in adult. Radiology **134**: 613-616, 1980

(Received on January 6, 2010)
(Accepted on March 4, 2010)